

アフリカと「アフリカの独立」に関する報道と理解(1)

川 端 正 久

はじめに

第二次世界大戦後、アフリカの植民地で民族主義運動が發展し、1960年前後に独立が達成された。本稿では、「アフリカの独立」(African Decolonization)をアフリカにおける植民地終焉の過程すなわち独立に向けた動向の総体として認識する。終戦直後の日本では、アフリカはほとんど知られていなかった。「アフリカの年」と言われた1960年の前後の頃になって、やっとアフリカは日本において知られるようになった。アフリカと「アフリカの独立」について日本の新聞・雑誌・著書はどのように報道・記述してきたのか、日本人はアフリカと「アフリカの独立」をどのように理解するようになったのかを解明することが本稿の目的である。本稿が対象とする時期は1945年8月から1960年12月までである。

新聞は朝日新聞と毎日新聞のアフリカ関係記事を整理する。「記事と動向」において、アフリカに関する新聞記事を要約し報道を年表的(年月日順)に提示する。「報道と解説」において、主要報道を解説する。論文と著書はアフリカに関する論文(雑誌・著書等における論文)と著書を整理する。「論文と著書」において、アフリカに関する論文と著書を文献目録的(発行月順)に提示する。「文献と概説」において、主要文献を概説する。

1 1945年

1-1 記事と動向

北アフリカ

エジプト

9月24日 エジプト政府は英軍のエジプト撤退とスーダンの合併を要求すると決定した（朝）。

南部アフリカ

南アフリカ連邦

8月25日 スマッツ首相は海軍の創設を主張した（毎）。

2-1 論文と著書

論文

「原住民司法論集」（ギュンター・ウィルケルマン「英國委任統治領タンガニカに於ける原住民司法」を含む10論文）『司法資料』（司法省秘書課）290号、1945年12月。

2 1946年

1-1 記事と動向

アフリカと世界

10月8日 国連フランス代表部は仏領カメルーンとトーゴランドの信託統治付託を申し出た（朝）。10月28日 国連エジプト代表は英軍のエジプト駐屯に反対を表明した（朝）。

北アフリカ

エジプト

2月26日 カイロの民衆は反英戦争準備を決議した（朝）。5月7日 英国
（龍法 '18）51-3, 2（1424）

外務省はエジプトからの撤兵に言及した（朝）。5月22日 エジプト政府が完全独立を要求し英エ交渉は決裂した（朝）。5月23日 英エ会談は暫く中止することになった（毎）。

2-1 論文と著書

論文

「アフリカ」ネストリーブケ（協調會譯）『各國労働組合運動史』（4版）協調會、1946年5月、272-273頁。「英領アフリカ各地」英國研究會綜合報告書『英國の基本的性格と對外政策』外務省調査局第一課、1946年8月、115-116頁。「エジプト法律思想」船田享二『法律思想史』愛文館、1946年12月、39-47頁。

著書

橘輝政『野口英世博士傳』山水社、1946年9月。岡島誠太郎『古代エジプト文化——パピルス古文書を中心として——』大八洲出版、1946年10月。

3 1947年

1-1 記事と動向

北アフリカ

エジプト

5月10日 ロンドンの週刊誌『シティ・オブザヴァー』の記者は英國のエジプト撤退に伴って米國が取って代わるだろうと述べた（朝）。

2-1 論文と著書

論文

「エジプトの幻想」野上彌生子『山彦』生活社、1947年2月、87-100頁。「アフリカ」『朝日年鑑 1947年版』朝日新聞社、1947年4月、351-355頁。「エ

チオピア問題と平和的解決案の失敗」 「エチオピア戦争と国際聯盟の没落」
林毅陸『歐洲最近外交史』慶應出版社、1947年6月、199-240頁。「モロッコ通信」衣奈多喜男『ヨーロッパ青鉛筆』朝日新聞社、1947年6月、26-38頁。
「エジプト文化」佐藤堅司『西洋文化史講話（古代篇）』風間書房、1947年10月、37-76頁。「銀葉樹」「光の國」「沙漠の花」吉江喬松『佛蘭西印象記』白水社、1947年12月、207-230頁。

著書

岡島誠太郎『エジプト史』平凡社、1947年3月。プーシキン（竹田慎吾譯）
『エジプトの夜』萬里閣、1947年7月。山川惣治『少年王者』集英社、1947年12月。

4 1948年

1-1 記事と動向

アフリカと日本

4月13日 『ジャーナル・オブ・コンマース』紙は日本の綿製品のアフリカへの輸出が増加すると報じた（毎）。9月21日 南アフリカ政府は対日貿易に参加すると伝えられた（朝）。

アフリカと世界

2月4日 ポルトガル政府は米国がアゾレス諸島を軍事基地として使用することに同意した（毎）。4月3日 スペインのファランヘ党の新聞はジブラルタルとタンジールの返還をスペイン政府に要求する運動を開始した（毎）。

北アフリカ

エジプト

5月22日 エジプト軍はパレスティナのベツレヘムに進撃した（毎）。6月2日 エジプト軍はテル・アヴィヴを砲撃した（朝）。

南部アフリカ

南アフリカ連邦

5月27日 スマッツ首相は総選挙で落選した（朝・毎）。5月30日 首相になったマランは英本（帝）国からの離脱を希望すると表明した（朝・毎）。6月3日 マラン首相は国民党とアフリカーナー党を中心とする新内閣を組織した（朝）。

2-1 論文と著書

論文

「アフリカの経済的開発」『世界週報』29巻12号、1948年3月、7-8頁。「動亂の因、エチオピア戦争」森正藏『第二次世界大戦の真相 轉落の歴史』鱒書房、1948年3月、35-54頁。今泉篤男「古代エジプトの美術」（上・下）『美術手帖』1巻4号、1948年4月、39-44頁；1巻5号、1948年5月、24-29頁。伊東みちお「アフリカの父——リビングストンの話——」『少年クラブ』35巻5号、1948年5月、22-23頁。「埃及紀行」『阿部次郎選集 Ⅲ 家つと』羽田書店、1948年5月、1-69頁。田中「エジプト米輸入の意義」『時事通信時事解説版』785号、1948年6月、1063頁。「ピラミッドの表情」「カイロの女」「タンジェの一夜」柳澤健『世界の花束』コスモポリタン社、1948年7月、104-122頁。板垣鷹穂「エジプト彫刻の性格」『隨筆人』18集、1948年8月、11-18頁。織田武雄「プント考——世界最古の航海に就て——」『古文化』1号、1948年10月、89-96頁。花田清輝「エジプト 沙漠について」綜合文化協會『二十世紀の世界』眞善美社、1948年10月、231-257頁。「アフリカ」國際連合經濟部編『世界經濟報告——資料と分析——（1945-47）』時事通信社、1948年11月、108-125頁。岩田慶治「南ニジェリアの集落とその地域——未開民族の例について——」『人文地理』1巻2号、1948年11月、53-63頁。「エジプトの外國貿易」『貿易速報』14号、1948年11月、1-4頁。織田武雄「ソロモン王のオフィル航海に就いて」『史林』32巻1号、1948年

11月、64-86頁。

著書

山路壯太郎『大アフリカ探險 魔獣の叫び』内田書店、1948年2月。政池仁『リヴィングストン傳』聖書の日本社、1948年3月。南洋一郎『新ターザン物語 バルーパーの冒険 片眼の黄金獅子』東雲堂装社、1948年5月。高木眞太郎『エジプトの謎』史學社、1948年10月。飯塚玲兒『沙漠の勇者』文人社、1948年11月。池田宣政『野口英世 熱と愛の巨人』偕成社、1948年11月。野上豊一郎『エヂプトの驚異』要書房、1948年11月。宮田丈二『冒険物語 秘密の王國』世界社、1948年12月。

2-2 文献と概説

「人文地理學會」（代表＝織田武雄京都大學文學部助教授）が1948年3月に誕生し、会員であった岩田慶治（当時、京都大學文學部特別研究生）はナイジェリア（アフリカ）研究を開始した。岩田論文「南ニジェリアの集落とその地域」は文献研究ノートであるが、戦後最初のアフリカ研究論文として評価できる（なお岩田は1958年以降、東南アジア研究に移行した）。

5 1949年

1-1 記事と動向

アフリカと日本

7月12日 英領東アフリカのケニアとウガンダはドル不足のために日本綿製品の輸入を停止すると発表した（朝）。12月8日 『アル・ザマン』紙はエジプト政府が日本製織物に対する輸入税を半減することを考慮していると報道した（朝）。

アフリカと世界

7月13日 ロンドンで開催された英連邦蔵相会議に南アフリカと南ロー
(龍法 '18) 51-3, 6 (1428)

デシアの蔵相が出席した（毎）。10月1日 イタリアのスフォルツァ外相は国連総会政治委員会においてリビア三地方の統合と独立を要望した（毎）。

北アフリカ

エジプト

2月24日 エジプトとイスラエルは停戦協定に調印した（毎）。7月25日 アブデル・ハディ・パシヤ内閣は総辞職した（毎）。7月26日 フッセイン・シリー・パシヤは野党を含めた連立内閣を成立させた（毎）。

[リビア]

6月1日 リビアの一部キレナイカのエミール・サエド・セヌシ（エミール・サヤド・セヌッシ）首長はキレナイカの独立を宣言した（朝・毎）。

南部アフリカ

2月18日 北ローデシア、南ローデシアおよびニアサランドの各代表は三地方を統合し中央アフリカ連邦を結成することに合意した（朝）。

南アフリカ連邦

1月15日 ダーバンでインド人とズールー人が衝突した（朝）。

1-2 報道と解説

中央アフリカ連邦の結成合意とキレナイカの独立宣言が報道された。「中央アフリカ連邦結成可決 [ヴィクトリア・フォールズ特電18日発 = AP特約] 英領北ローデシア、南ローデシアおよび英保護領ニアサランド各代表は18日、三地方を統合、新中央アフリカ連邦結成を満場一致で可決した」（朝、2月20日）。これは英国が支配する白人優越連邦を南部アフリカに結成しようとする構想であった。「キレナイカ独立宣言 [ベンガジ（北アフリカ）特電（UP）1日発] アフリカの元イタリア領リビアの一部キレナイカのアラブ族酋長エミール・サヤド・イドリス・エル・セヌッシは1日夜突如キレナイカの独立を宣言」（毎、6月3日）。これはリビア独立に向けての端緒であった。

2-1 論文と著書

論文

「埃及見物」川上嘉市『隨筆 運命を拓く』経済社、1949年1月、281-302頁。フレデリック・ソンダーン二世「南アフリカに見るエデンの樂園」『リーダーズ・ダイジェスト』4巻2号、1949年2月、30-34頁。「舊石器時代のアフリカ大陸」「エジプト研究の過去と現在」ねず・まさし『原始社會——考古學的研究——』三笠書房、1949年3月、29-39, 135-144頁。「ナイジェリア」（を含む5カ国）ベティ・ウォーレス（清水金二郎譯）『世界の労働は成年に達する = 世界の労働運動 =』双美書房、1949年3月、20-31, 36-61頁。「南ア連邦」外務省調査局第四課『英連邦の政治経済情勢』外務省調査局、1949年3月、229-242頁。深澤四郎「闇黒アフリカ探検——スタンリーとリヴィングストン——」；野尻抱影「今昔エジプト墓泥坊」『天馬』1巻3号、1949年3月、102-111, 118-121頁。（外務省調査局第四課）「日埃貿易の現状と埃及の綿業」『海外経済事情』26号、1949年4月、15-16頁。「エジプト」「リビア」「佛領北アフリカ」外務省調査局第四課『歐洲及び中近東諸國政治経済情勢（第二分冊）』外務省調査局、1949年5月、603-633頁。日高一郎「明けゆくアフリカ（暗黒大陸）」『世界の動き』4巻9号、1949年5月、18-23頁。「エジプト市場は今後どう變るか」『The Trade Circle』2巻17号、1949年6月、2-4頁。藤野靖「埃及見物」『社會地理』14号、1949年6月、2-5頁。「ヘーラクレースの柱」泉井久之助『古典と現代』甲文社、1949年6月、38-85頁。「暗黒大陸を支配するツェツェ繩」『カトリック・ダイジェスト』2巻4号、1949年7月、44-47頁。辻村太郎（紹介）リチャード・アブジョン・ライト「アフリカ空中寫眞集」『地理學評論』22巻2号、1949年8月、36-37頁。（堀義明）「アフリカ」「南ア連邦」「西南アフリカ」「アフリカ諸國」「アフリカ各國領土」『世界年鑑 1950年版』共同通信社、1949年11月、341-352頁。岩田慶治「TIMBUKTU——沙漠と草原の結び目——」『立命館文学』73-74号、1949年11月、67-77頁。龍村謙「エジプト（龍法 '18）51-3, 8（1430）」

の美術」弘文堂編集部編『西歐美術圖譜』弘文堂書房、1949年11月、21-25頁。きだ・みのる「サハラ前哨地帯」『世界春秋』1巻2号、1949年12月、111-115頁。

著書

外務省調査局第四課『エジプトの棉花事情』（調四情判資料43号）外務省調査局、1949年1月（推定）。外務省調査局第四課『旧イタリア植民地問題（一）』（調四情判資料49号）外務省調査局、1949年4月。外務省調査局第四課『最近のエジプト政治経済貿易事情』（調四情判資料52号）外務省調査局、1949年5月。外務省調査局第四課『旧イタリア植民地問題（二）』（調四情判資料66号）外務省調査局、1949年12月。

2-2 文献と概説

1949年の特徴は外務省調査局第四課がアラブ・北アフリカ（とりわけエジプト）の政治経済情勢について調査し報告書を作成したことである。『通商白書』（創刊号、1949年9月）は「ニゼリア、南阿聯邦、ケニヤ、ウガンダ、タンガニカ等が重要である」（44頁）と指摘した。雑誌論文として特筆に値するのは日高一郎（毎日新聞欧米部）「明けゆくアフリカ（暗黒大陸）」である。日高論文は欧米主導のアフリカ開発計画を詳細に紹介・分析した。泉井久之助「ヘーラクレスの柱」はアフリカ西岸を航海したフェニキアの「ハンノーの周航記」すなわちアフリカに関する最初の歴史記載を紹介した。言語学者の泉井久之助（京都大學文學部教授）による貴重なアフリカ史研究である。

6 1950年

1-1 記事と動向

アフリカと日本

3月27日 エジプトと日本は3万ポンドの通商協定を締結した（毎）。7月4日 日本政府はエジプト米を輸入することになった（毎）。7月15日 エジプト政府は6万トンの米穀対日輸出を許可した（毎）。7月17日 エジプト政府は日本船の出入国を許可した（毎）。8月29日 ベルギー通貨地域（アフリカを含む）と日本は通商金融協定に調印した（毎）。

アフリカと世界

11月17日 国連総会は前イタリア領植民地リビアが明年末までに独立する提案を可決した（毎）。12月13日 国連総会は元ドイツ領植民地西南アフリカを国連の統治下に置く決議を採択した（毎）。

北アフリカ

エジプト

1月5日 総選挙の結果はワフド党の勝利であった（朝）。1月6日 ファールーク国王はワフド党のナハス・パシャに組閣を命令した（毎）。11月16日 英国のベウイン外相はスエズ駐在軍を撤退する意図はないと言明した（毎）。11月23日 エジプト政府は全土に非常事態を宣言した（朝）。

南部アフリカ

南アフリカ連邦

6月20日 南ア連邦議会（下院）は共産党の活動を禁止する法案を可決した（朝・毎）。南アフリカ連邦共産党は自ら解体すると発表した（朝）。

1-2 報道と解説

1950年の新聞では、国際の紙面が狭く、国際面では朝鮮戦争の関連記事が多かった。アフリカにおける民族主義運動は新たな段階を迎えていたが、日本ではこうした動向を報道する新聞記事は少なかった。リビアと西南アフリカに関する記事が掲載された。リビアの独立が決定された。「リビアの明年独立可決〔フラッシング・メドウス17日発＝UP特約〕国連総会は17日、前イタリア領植民地リビアに明年末までに主権国家としての完全な（龍法 '18）51-3, 10（1432）

独立を附与する最後案を承認した」（毎、11月19日）。西南アフリカは国連の管轄下に置かれることが決定された。「南阿元独植民地の国連統治 総会で可決〔フラッシング・メドウズ13日発＝AFP特約〕 国連総会は13日、西南アフリカの元ドイツ植民地の統治を南阿連邦政府でなく、国連の権限内におく決議案を…採択した」（毎、12月15日）。

2-1 論文と著書

論文

ねず・まさし「ピラミッドの發掘」『歴史評論』4巻1号、1950年1月、12-16, 45頁。外務省政務局經濟課「エジプトの外國貿易事情」『日本貿易館ニュース』82号、1950年2月、14-15頁。新規矩男「古代エジプトの壁画」『三彩』40号、1950年3月、39-42頁。大林茂「國際都市カサブランカ」『雄鶏通信』6巻2号、1950年3月、2-13頁。通商産業省通商局通商調査課「英領東アフリカ事情」『通商月報』2巻3号、1950年3月、15-21頁。「英領東アフリカの貿易と經濟」『海外經濟事情』49号、1950年4月、14-15頁。山本隆吉他「最近のエジプト事情についての座談會記事」『纖維學會誌』6巻2号、1950年4月、43, 61頁。「エジプト 工業の低水準に生産は難行」『世界週報』31巻21号、1950年5月、10-11頁。檜垣正忠「南アフリカ連邦」；中川彦治「南阿雜記」『貿易界』11号、1950年5月、27-30, 46-51頁。「英領東アフリカの近情」『海外經濟事情』53号、1950年6月、12-13頁。きだ・みのる「モロッコ」『新潮』47巻6号、1950年6月、28-39頁。岩田慶治「西アフリカに於ける二つの交易形態」『史林』33巻3号、1950年7月、20-38頁。木村修吉「エジプト雜観」『經濟人』4巻7号、1950年7月、63-64頁。田中秀夫「レーヨンミッション旅行記（第一回）」；蒲熊雄「化纖市場としての東、南アフリカ」『帝人タイムス』20巻7号、1950年7月、25-30, 31-34頁。「アフリカ洲」小原國芳編『學習大辭典 世界地理篇』玉川大學出版部、1950年8月、379-417頁。飯島淳秀「「エジプト人」について」『書物』4号、1950年8月、

64-67頁。秋永芳郎「アフリカの聖花」『ニューエイジ』2巻9号、1950年9月、32-35頁。木村（修吉）「エデ(ジ)プト」『化繊月報』3巻9号、1950年9月、16-19頁。通商産業省「エジプト米の輸入について」『通産省公報』272号、1950年9月、1頁。坂口精「エジプト渡航日記」『専売』25号、1950年10月、8-19頁；26号、1950年11月、12-21頁。全米綿花評議會編「エジプトの綿花と綿業」（上・中・下）『日本紡績月報』45号、1950年10月、20-42頁；49号、1951年3月、23-43頁；51号、1951年5月、12-17頁。「ベルギー領コンゴの市場性」『海外経済事情』61号、1950年10月、12-13頁。「白アフリカと黒アフリカ」W・ハウエルズ（石田周三・石田アヤ譯）『人間の來た道——人類學入門——』創元社、1950年11月、377-392頁。ハビブ「エジプト通信」；山邊「地方人は日本品を熱望」『海外貿易情報』1巻11号、1950年11月、12-15, 15頁。「アフリカの分割」「帝國主義の植民地」嘉治眞三『開拓と植民』三省堂、1950年12月、183-205頁。「エジプトの貿易情勢とわが國との貿易」『産業と貿易』1巻7号、1950年12月、34-36頁。ハビブ「エジプト通信」『海外貿易情報』1巻12号、1950年12月、5-9頁。「歴史の脚光を浴び始めたアフリカ」佐藤弘編『新しい世界 Ⅲ』三省堂、1950年12月、162-202頁。

著書

外務省調査局第四課『最近に於けるアラブ地域の政治情勢』（調四情判資料76号）外務省調査局、1950年2月。ミカ・ワルタリ（飯島淳秀譯）『エジプト人』（上巻・下巻）岡倉書房、1950年5月；1950年9月。小山莊一郎『アフリカ探検記 猛獸境を行く』大日本雄弁会講談社、1950年8月。下村泰介編『アフリカにおける綿花』日本綿花協会綿花経済研究所、1950年10月。

2-2 文献と概説

論文の件数は1950年に大幅に増加した。『通商白書』（2号、1950年5月）は輸出市場構成においてアフリカが11.5%（1949年）に達したと指摘した（龍法 '18）51-3, 12（1434）

(61頁)。日本の経済界はアフリカ市場へのアプローチを開始（再開）した。商社（会社）の幹部がアフリカを訪問し現地調査を実施した。繊維業界団体は1950年1月にレーヨン・ミッションをアジア・アフリカ諸国に派遣し、団員は1950年3月にカイロに入った。団長は田中秀夫（帝国人絹専務取締役）、団員は福渡龍（新光レイヨン）、小里卓二（東洋レーヨン）、木村修吉（丸紅）、星出京吉（東洋綿花）であり、それに蒲熊雄（伊藤萬）等7名が加わった。坂口精（日本専売公社たばこ技術課長）はたばこ輸出促進を目的として1950年7月にカイロに入った。坂口論文は当時、日綿の山田、日商の貞広、江商の小林がカイロにいたと伝えた。中川彦治は「南アフリカに在るは僅々三年であるが、随分各地を飛び回った。南阿連邦は勿論モザンビーク、ニヤサランドロデシア、獨領西南阿等南緯十度以南の大陸は一通り回った。…丁度十年前のことである」（『南阿雜記』46頁）と回想した。貴重な経験（商工省貿易通信員トシテ東阿ナイロビニ駐在スルコト約五年、後外務省ニ入り領事トナリ南アフリカに勤數年／『西南アフリカ事情』を1943年11月に刊行）をした日本人がいたのである。

経済貿易情報雑誌として『海外経済事情』や『海外貿易情報』が刊行され、アフリカ諸国の経済貿易事情が紹介された。『海外経済事情』は世界経済調査会が発行した。『海外貿易情報』は東京都経済局貿易課が発行した。現地通信員としてカイロにデー・ハビブ、ウガンダに山邊義昭を配置していた。

世界史の概説書では、アフリカを記述する著書が出現した。佐藤弘（一橋大学教授）編『新しい世界 Ⅲ』は「アフリカは政治的にも世界史の舞台に登場しつつあると言えるであろう」（202頁）と明記した。しかし一般的には、アフリカはまだ正当に紹介されていなかった。アフリカ人は未開の土人、土民、土着民であると記述された。「土人はいろいろと異なった風俗習慣を有し…非常に文化が遅れている」（『学習大辭典 世界地理篇』382頁）。

7 1951年

1-1 記事と動向

アフリカと日本

6月13日 大阪商船はアフリカ定期航路を許可された（毎）。8月16日 エジプト外務当局は対日講和に関してサンフランシスコ会議に参加しないと伝えられた（朝）。8月29日 上野動物園の林壽郎企画係長が「アフリカへ猛獣狩り」に出発することになった（朝）。9月30日 英国のショークロス商相は日本との競争から英国綿業を保護すると発言した（毎）。

アフリカと世界

8月7日 米英仏三カ国はスエズ封鎖解除をエジプト政府に要求した（毎）。10月5日 エジプト政府はモロッコ問題を国連に提訴すると国連事務総長に要請した（毎）。10月11日 米英仏土四カ国は中東防衛機構を創設すると提案した（朝）。四カ国提案（の協議）はエジプトの反対で延期された（朝）。10月13日 四カ国はエジプト政府に中東防衛機構設置提案に参加を要請した（朝・毎）。10月14日 エジプト政府は四カ国提案を拒否した（朝・毎）。10月29日 スーダン政府はスーダン住民に選択権を与えるよう国連に要請した（朝）。11月7日 国連のリー事務総長はモロッコ問題とリビア問題を国連特別委員会に提案した（毎）。11月30日 エジプト外相はモロッコ問題討議の再開を要請した（朝）。12月8日 エジプト外相代理はスエズ問題を国連に提訴すると発表した（朝）。12月13日 南アフリカ連邦政府は国連信託統治委員会から代表を引揚げた（毎）。

北アフリカ

エジプト

3月29日 エジプトのナハス・バシャ首相は英軍の撤退、スーダンへのエジプトの主権を英国政府に要求した（毎）。5月2日 エジプトのサラ・エル・ディン外相は英軍の撤退を要求した（毎）。7月21日 エジプト政府（龍法 '18）51-3, 14（1436）

はハイファ地区を国際地帯にすることを提案した（毎）。10月8日 エジプトのナハス・パシャ首相は英軍のエジプト駐留を認めた英エ条約およびスーダン共同管理を定めた英エ協定を破棄すると宣言した（朝・毎）。10月9日 英国のモリソン外相は条約破棄を承認できないと声明した（朝・毎）。10月10日 カイロで学生の暴動が発生した（毎）。10月12日 英国のモリソン外相は必要なら武力行使をすると発言した（朝）。10月13日 エジプト政府高官は英軍の撤退が先決と言明した（毎）。10月15日 エジプト議会は条約廃棄を承認した（毎）。10月16日 イスマイリアなどで暴動が発生した（朝・毎）。英軍は実力行使を開始した（毎）。10月17日 エジプト政府は全土に非常事態を宣言した（朝）。カイロでデモが発生した（朝）。10月18日 英エ軍隊の初の衝突事件が発生し死傷者がでた（朝・毎）。社説「エジプト情勢の重大化」（毎）。佐倉特派員（ロンドン）報告「風雲のエジプト 英、スエズを断固防衛」（毎）。10月20日 エジプト政府はカイロに非常事態を宣言した（朝・毎）。10月21日 エジプト議会は総動員法を可決した（朝・毎）。英軍はカイロ・スエズ間を遮断した（朝・毎）。10月26日 エジプト外相は英軍の撤退が先決と言明した（朝）。10月27日 エジプト政府はカイロに非常事態を宣言した（毎）。10月31日 英軍はスエズ市を封鎖した（毎）。11月1日 中村特派員のサラ・エル・ディン外相との会見報告「危機はらむエジプト」（朝）。11月13日 エジプト政府は全土に非常事態を宣言した（朝）。中村特派員（カイロ）報告「エジプトのナショナリズム “反英”のたゞ一筋」（朝）。11月14日 カイロで百万人の大反英デモが行われた（朝・毎）。11月20日 渡辺特派員（カイロ）報告「現地に見る英・エ紛争 対立悪化の一途」（毎）。11月26日 渡辺特派員（カイロ）報告「無気味な沈黙行進 エジプトの反英デモを見る」（毎）。11月28日 渡辺特派員（カイロ）報告「ソ連圏へ接近するエジプト 英への経済依存を脱却」（毎）。11月30日 渡辺特派員（カイロ）報告「観光客は減る一方 英・エ紛争の飛ばっち」（毎）。12月3日 英軍とエジプト人の

衝突事件が発生した（朝・毎）。12月4日 エジプト政府は全土に非常事態を宣言した（朝・毎）。反英デモが続いた（朝・毎）。12月6日 エジプト政府は全土に非常事態を宣言した（毎）。12月8日 英軍はスエズを封鎖した（毎）。12月13日 エジプト政府は駐英大使の召還を決定した（朝・毎）。社説「緊迫したエジプト情勢」（毎）。12月14日 英国政府は英エ新条約の交渉についてエジプト外相に提案した（朝・毎）。12月17日 英国とエジプトは外相会談を開催した（毎）。熊本特派員（カイロ）報告「暗雲こもるスエズ地帯 エジプト望むは撤兵」（朝）。

〔スーダン〕

10月10日 スーダン政府はスーダン人民の完全自治を宣言した（朝）。10月12日 英軍連隊がスーダンに派遣されることになった（朝・毎）。10月13日 英国政府はスーダンの将来に関する三項目の提案をした（朝）。10月22日 エジプト政府はスーダン事務所を閉鎖した（朝）。

〔リビア〕

12月24日 午前零時をもってリビアは独立国となった（朝）。リビアのセヌシ国王は「リビアは独立主権国家となった」と宣言した（朝・毎）。12月26日 解説「独立国リビア 対ソ戦略の重要拠点」（毎）。

〔モロッコ〕

8月8日 米軍一千名が仏領モロッコの米軍基地に到着した（毎）。10月31日 地方選挙をめぐって暴動が発生した（朝）。11月1日 カサブランカで暴動が発生した（毎）。

東アフリカ

エチオピア

4月11日 エチオピア政府は朝鮮に派兵することになった（朝）。

南部アフリカ

南アフリカ連邦

11月10日 米国南ア武器譲渡協定が近く調印されると報道された（毎）。

1-2 報道と解説

アフリカと日本の貿易にとって重要であった大阪商船のアフリカ定期航路が6月に許可され7月に再開された。「アフリカ定期航路 大阪商船に配船許可 大阪商船がかねて総司令部に申請中の日本—アフリカ東南岸諸港とのレギュラー・サービス（定期配船）が許可された旨13日同社に通知があったので同社は…7月中旬に大阪丸の出航を予定している」（毎、6月14日）。これはアフリカ定期航路の再開であった。

1951年、国際記事は全般的に増加し、アフリカ関係記事も増量した。しかし9月まではアフリカ記事は少なかった。1951年の最大の出来事は10月8日にエジプト政府が対英条約破棄を宣言したことである。宣言の内容はエジプト政府の従来主張を継承したものである。問題はそれをエジプト政府が実行に移したことである。同時に、これは英国のアジア・アラブ・アフリカ支配体制の根幹を揺るがすことになった。それはやがてアフリカの植民地体制の崩壊につながっていった。

エジプト政府は10月8日に英エ条約の破棄を宣言した。朝日新聞の第一報は次のとおりである。「エジプト、対英条約を破棄 スエズ駐兵権無視 スーダンの主権宣言 [カイロ8日発＝AP特約] エジプト政府はスエズ運河地帯の英軍駐在を認めた1936年の英・エジプト条約およびスーダンに対する英・エジプト両国の共同管理を定めた1899年の条約を破棄するに決し、ナハス・パシャ首相は8日夜議会でそのむね宣言するとともに、右条約を破棄する法案の正式承認を議会に要求」（朝、10月9日）。毎日新聞の第一報は次のとおりである。「英のスエズ防衛権廃棄 貫徹に犠牲惜まず エジプト首相声明 [カイロ8日発＝UP特約] ナハス・パシャ・エジプト首相は8日、英国にスエズ運河防衛権を与える条約を破棄する法案、スーダンをエジプトに合併するための憲法改正案及びファルーク国王にエジプトならびにスーダン国王の称号を与える法案を議会に提出」（毎、10月9日）。

このように現地からの報告は最初、外国通信社の配信記事に頼ることに

なった。日本人記者として朝日新聞記者の最初の現地報告は中村特派員がサラ・エル・ディン外相と会見した記事（バイルート発）「危機をはらむエジプト」である。その後、中村特派員はカイロに入り、「エジプトのナショナリズム」を報告した。「エジプトのナショナリズムは長年にわたる英国との抗争の産物である。歴史の所産である」（朝、11月13日）。次いでカイロに入った熊本特派員は「暗雲こもるスエズ地帯」を報告した。

同じ頃、毎日新聞記者でカイロに入ったのは渡辺特派員であった。「現地に見る英・エ紛争〔カイロにて渡辺特派員発〕エジプトの首都カイロは意外な静けさである。13日ポートサイド市に次ぎ15日約五十万人の学生、各団体が参加したカイロのデモ行進を除けば、街には一枚の反英ビラもなくアジ演説も見られない」（毎、11月20日）。「無気味な沈黙行進 エジプト反英デモを見る〔カイロで渡辺特派員発〕記者は1919年以来最大のデモという14日のカイロ・デモ行進を見たが、この日のデモ参加人員約五十万人、見物人も約五十万人で、カイロ全市は終日デモにぬりつぶされた」（毎、11月26日）。

リビアは12月24日に独立した。「リビヤ新発足〔ベンガジ24日発＝ロイター特約〕イタリアの旧アフリカ植民地リビヤ新王エミル・サイド・イドリス・エル・セヌッシは24日ラジオを通じてその独立を宣言」（毎、12月25日）。リビア独立は北アフリカ諸国の独立の先駆けとなった。

2-1 論文と著書

論文

岩田慶治（紹介）J.H.シュルツ「熱帯アフリカにおける人間生態学のころみ」『人文地理』3巻1号、1951年1月、101頁。小幡操「イギリスとアジア——国際第三勢力へのバランス——」『中央公論』66巻1号、1951年1月、279-286頁。ハビブ「日本との通商協定は不可能」；山邊「日本品は低価格の代名詞」『海外貿易情報』2巻1号、1951年1月、5-8, 9頁。市場第二課「佛（龍法 '18）51-3, 18（1440）」

領ソマリランドとの貿易決済方式について』『通産省公報』394号、1951年2月、5頁。山邊「アフリカ通信」；ハビブ「王位論は平靜である」『海外貿易情報』2巻2号、1951年2月、7、8-11頁。「戦後における南阿連邦の産業・貿易の発展」『海外経済事情』71号、1951年3月、14-16頁。ハビブ「アジアの戦争で景気の良くなったエジプト経済界」；山邊「もつと日本品の宣傳が必要」『海外貿易情報』2巻3号、1951年3月、5-7、8頁。福井文雄「アジア・アラブ・ブロックの力」『中央公論』66巻3号、1951年3月、80-81頁。「エジプト向邦品の輸出について」『通産省公報』436号、1951年4月、1-2頁。岡倉古志郎「アジア・アラブ諸國」『アジア社會とアジア民族』春秋社、1951年4月、119-132頁。小黑「イギリスのエジプト撤兵」『時事通信 時事解説版』1624号、1951年4月、663頁。「開けゆくアフリカ大陸」川喜田二郎編『目で見る社会科 33 世界の農牧生活』毎日新聞社、1951年4月、16-19頁。ダレル・ベリガン「真晝のエジプト」『改造』32巻5号、1951年4月、188-195頁。五島忠久「スワヒリ語における母音調和について」『音聲の研究』7輯、1951年5月、61-74頁。長沼春雄「アフリカを切りはなす」『丸』4巻4号、1951年5月、66-71頁。「モロッコ情勢と獨立問題」『調査と資料』（外務省調査局第四課）1巻7号、1951年5月、33-37頁。「モロッコの経済、貿易事情」『海外経済事情』76号、1951年5月、14-15頁。市場第二課「エジプト政府の棉花輸出振興策」『通産省公報』486号、1951年6月、1頁。野口眞造「クレオパトラ以前——古代エジプトの盛榮——」『染織美術』2巻9号、1951年6月、48-58頁。「ポルトガル領アンゴラの貿易事情」『海外経済事情』77号、1951年6月、14-16頁。山邊義昭「ウガンダ短信」；ジョセフ・ビ(ヂ)ー・ハビブ「世界的波動にあえぐ埃及産業」『海外貿易情報』17号、1951年6月、4、9-10頁。渡邊金一「USIAKOI MISTHOTAIについて——羅馬帝制期に於ける属州埃及所在皇帝御料地(usiai)經營の一側面——」『一橋論叢』25巻6号、1951年6月、57-77頁。木内克「エジプトの彫刻」『アトリエ』295号、1951年7月、47-48頁。「チュニスの貿易事情」『海外経済

事情』79号、1951年7月、14-15頁。「ベルギー（領）コンゴに於ける日本品」；山邊義昭「ウガンダに於ける綿布と雜貨」；ジョセフ・デー・ハビブ「埃及の綿花輸出と財界近況」『海外貿易情報』19号、1951年7月、3、4-5、6-7頁。「ベルギー領コンゴの開発十カ年計画」『經濟と外交』21号、1951年7月、39-40頁。山邊義昭「ウガンダに於ける日本雜貨とその競争品」『海外貿易情報』20号、1951年7月、4-5頁。「アフリカ經濟概観」『東京銀行月報』3卷8号、1951年8月、44-47頁。「コンゴ盆地條約の權益放棄とその意義」『海外經濟事情』83号、1951年9月、14-15頁。入江啓四郎「エジプト問題の史的背景——英埃關係の一世紀——」『世界週報』32卷29号、1951年10月、30-32頁。「エジプトの民族運動」『労働情報』90号、1951年10月、19-22頁。平貞藏「エジプト問題の登場」『時事通信 時事解説版』1795号、1951年10月、1979-1980頁。A・E・ハウエル「アフリカの少年殉教物語」『カトリック・ダイジェスト』4卷10号、1951年10月、101-124頁。「八月現在におけるマダガスカルの經濟事情」『經濟と外交』35号、1951年10月、25-26頁。蜂須賀正氏「サハラ砂漠」（上・下）『動物文學』17卷2号、1951年10月、6-9頁；17卷3号、1951年12月、10-13頁。ジョセフ・ヂ・ハビブ「窮境に立つ埃及業界」『海外貿易情報』22号、1951年10月、12-13頁。「南アフリカ連邦に於ける自動車の輸入政策」「南ローデシアに於ける自動車組立工場の建設計畫」『自動車海外情報』1卷2号、1951年10月、55頁。安田志郎「新たな危機にどう対処するか エジプトの対英條約破棄の狙いと英、米、佛の出方」『時事通信 時事解説版』1784号、1951年10月、1878-1880頁。嬉野滿「エジプト・南阿地方の諸狀勢」『同盟時報』106号、1951年11月、41-44頁。「エジプトの經濟と民族運動」『アジア經濟旬報』127号、1951年11月、12-20頁。「エジプトの国内事情」『世界情勢旬報』142号、1951年11月、19-24頁。「エジプト問題の發生」『經濟往來』3卷11号、1951年11月、81頁。甲斐篤二郎・村田一見・小川攻質・小杉眞・有方忠男（座談会）「見てきた東南アジア・アフリカ市場——今後の市場對策を語る（龍法 '18）51-3、20（1442）

——」『輸出綿糸布月報』1巻7号、1951年11月、24-35頁。「植民地の解放運動」『産業労働月報』5巻11号、1951年11月、9-15頁。「スエズ運河と石油」『世界』71号、1951年11月、16-20頁。高山底「嵐をはらむスエズ地帯」『サンデー毎日』1951年11月4日、12-13頁。T「騒然たる中近東 = スエズをめぐる問題 =」『エコノミスト』29巻31号、1951年11月、34-35頁。「南阿連邦における外国資本の役割」『海外経済事情』88号、1951年11月、13-15頁。ジョセフ・デ・ハビブ「埃及の繊維産業と貿易」；山邊義昭「ウガンダに日本品見本市を」『海外貿易情報』23号、1951年11月、9-11, 12頁。穂高幸二「スエズの風雲」『経済タイムス』35巻11号、1951年11月、16-18頁。「リビアにおけるイタリア財産に関する伊英暫定協定」『調査と資料』（外務省調査局第四課）2巻9号、1951年11月、65-69頁。蠟山芳郎「アジア・アラブ民族運動の特色」；入江啓四郎「アラブ民族の決起」；「中近東の経済的地位」『世界週報』32巻30号、1951年11月、14-16, 16-19, 19-22頁。渡邊金一「ヘレニズム埃及と社会経済史の二大業績」『一橋論叢』26巻5号、1951年11月、140-168頁。秋山克「スエズ運河の暗雲 英帝国主義の衰退」『官業労働』5巻12号、1951年12月、42-43頁。「アフリカ——2—— 南阿・白領コンゴ」『ジェットロ』1巻2号、1951年12月、7-12頁。「アフリカ経済の現状と開発計画」『世界週報』32巻34号、1951年12月、29-36頁。井上勇「ピカリッと光る文明批評も 山田吉彦氏の紀行書『モロッコ』」『時事通信時事解説版』1829号、1951年12月、2264頁。「英領東アフリカの経済状況——ボンベイ在外事務所報告——」『経済と外交』44号、1951年12月、28-29頁。「エジプトの経済的地位 中近東の参考書②」『エコノミスト』29巻34号、1951年12月、54-55頁。「危機に立つスーダンとスエズ運河」『輸出綿糸布月報』1巻8号、1951年12月、25-26頁。能登志雄「アフリカの氣候に耐え得るならば」『學苑』12巻12号、1951年12月、40-42頁。信義守重「エジプト、スエズ運河に運命託す」；上園信高「又も噴き上げた近東 英國に迫るエジプト」『實業之世界』48巻12号、1951年12月、61-62, 63頁。

矢崎美盛「アフリカの原始絵画」『美術手帖』51号、1951年12月、45-50頁。
山邊義昭「ウガンダに於ける本邦商品と競争品」「ウガンダに於ける商品
価格」『海外貿易情報』24号、1951年12月、17, 18頁。

著書

「タンガニカ地域に関する信託統治協定」(を含む6協定)『条約集 第29
集』(上巻) 外務省条約局、1951年1月。『濠洲アフリカ貿易事情』経済安
定本部官房経済計画室、1951年2月。野尻抱影『リビングストーンとスタン
レー』広島図書、1951年5月。外務省調査局第四課『南アフリカ連邦の現状』
外務省調査局、1951年6月。アンドレ・ジイド(河盛好藏譯)『コンゴ紀行』
新潮社、1951年6月。橋爪健『暗黒大陸探検 スタンリイ』ポプラ社、
1951年6月。ピエール・ロチ(渡邊一夫譯)『アフリカ騎兵』白水社、1951
年8月。通産省通商局『英國・濠州・南阿貿易の手引』貿易刊行會、1951
年9月。山田吉彦『モロッコ』岩波書店、1951年10月。外務省欧米局第四
課『一九五〇年のベルギー領コンゴ』(欧米四情判資料2号) 外務省欧米
局、1951年12月。

2-2 文献と概説

日本の商社はアフリカで活動した。日本綿糸輸出協會は市場調査団(甲
斐篤二郎等5名)を東南アジア・アフリカに派遣した。アフリカ市場(東阿、
西阿、エジプト)を調査した小川攻質(伊藤忠商事)はアフリカ出張所を
モンバサに開設する可能性に言及した(「見てきた東南アジア・アフリカ
市場」34頁)。1950年、大阪商人は12人の店員が当地(ウガンダ)に出張
していた。1951年、「東阿には大阪の兼松、日本綿花、江商、東洋綿花、
山一株式、タヅキ社、岩尾社等の社員が巡回」(「ウガンダに日本品見本市
を」12頁)していた。

当時、世界の第三勢力としてアジアの存在が焦点であった。『中央公論』
(1951年新年号)は「アジアのナショナリズム」を特集した。その中で、
(龍法 '18) 51-3, 22 (1444)

小幡操（朝日新聞欧米部次長）は「20世紀後半はアジアの世紀」と強調した。アジアに次いでアラブが台頭してきたので、「アジア・アラブ」勢力という概念が登場した。福井文雄（朝日新聞論説委員）は「アジア・アラブ・ブロック」、岡倉古志郎（世界経済研究所員）は「アジア・アラブ諸国」と呼称した。アラブ民族主義の前進はエジプトに代表された。エジプトの民族運動は「まさに二十世紀の歴史を大きく彩るものというべきであろう」（「エジプトの民族運動」22頁）。「エジプト民族解放のための民主主義運動」という統一戦線がつくられた」（「エジプトの経済と民族運動」17頁）。「労働者と農民の闘争、平和擁護の闘いと分析された」（「エジプトの国内事情」22-24頁）。「エジプトの解放運動は、もはやいかなる威嚇と懐柔政策をもつてしても、阻止することができない」（「植民地の解放運動」15頁）。蠟山芳郎（共同通信社東亞部）はアジア・アラブの民族運動を反植民地主義として理解した。「永く植民地支配の下にしいたげられていた諸民族は、いまや民族運動の火の手をあげつつある」（「アジア・アラブ民族運動の特色」14頁）。アラブ・エジプトの台頭がアフリカにかすかな曙光をもたらしたことを嬉野満洲雄（読売新聞論説室）は見逃さなかった。「『暗黒の大陸』にも解放と向上の曙光がおとずれてきた」（「エジプト・南阿地方の諸状況」44頁）。

1951年の傑作は山田吉彦『モロッコ』である。パリ大学で社会学を勉強した山田は1939年春から夏にかけてモロッコを訪問した。その時の紀行記である（前著『モロッコ紀行』は1943年12月に刊行）。写真も豊富、内容も面白い。書評において、井上勇は同書がフランスの植民地政策を批判し、「ピカリッと光る文明批評」であると評言した。なお山田吉彦（本名）はきだ・みのる（筆名）である。研究論文では五島忠久（大阪大学教養部助教授）「スワヒリ語における母音調和について」がある。「土人」の呼称については議論があった。野尻抱影（早稲田大学文学部講師）は「土人」という表現はヨーロッパ人の見方であったと解説した（『リビングストンと

スタンレー』118頁)。川喜田二郎(大阪市立大学法文学部助教授)は「パ
ンツ族という黒人」と表現した(『目で見る社会科』18頁)。

8 1952年

1-1 記事と動向

アフリカと日本

3月26日 エジプト政府は対日外交の再開を決定した(朝・毎)。5月16
日 南アフリカ連邦議会は対日平和条約を批准した(朝・毎)。5月30日
南アフリカ連邦議会(上院)は対日平和条約を批准した(毎)。7月29日
英国植民地省はケニアやナイジェリアの政庁に日本繊維品輸入禁止を要請
した(朝)。9月13日 日本は日本粗布の輸入でエチオピアと通商した(毎)。
10月14日 日本政府は南アフリカ連邦に総領事館を開設することを決定し
た(朝)。10月28日 南アフリカ連邦国防相が来日した(毎)。11月1日
エジプトの新聞は日本の綿花買付を希望すると報道した(朝)。11月3日
エジプトと日本は国交を再開した(朝・毎)。日本政府は駐エジプト公使
に与謝野秀の起用を内定した(毎)。11月13日 エジプト政府は対日平和
条約を承認した(朝・毎)。12月19日 国連総会特別委員会は日本の加盟
を総会に要請する決議を可決した(毎)。12月25日 日本の通商使節団は
エチオピアを訪問した(朝)。12月29日 与謝野秀公使はカイロに到着し
た(朝)。

アフリカと世界

1月4日 リビア王国は国連加盟を申請した(朝)。1月9日 国連総会信
託統治委員会は自治促進決議案を可決した(朝)。1月10日 エジプト政府
は四カ国提案を拒否した(朝)。1月14日 チュニジア政府は自治問題につ
いて国連安保理に調停を依頼した(朝・毎)。1月28日 国連政治委員会は
リビアの国連加盟を決議した(朝)。3月31日 アジア・アラブ12カ国は
(龍法 '18) 51-3, 24 (1446)

チュニジア問題を国連に提訴した（朝）。4月2日 国連安保理はチュニジア問題を討議することになった（毎）。4月14日 国連安保理はチュニジア問題の審議を否決した（朝・毎）。6月20日 アジア・アラブ13カ国はチュニジア問題国連特別総会の開催を要求した（朝）。9月12日 アジア・アラブ12カ国は南アフリカ連邦の人種問題を討議するよう国連に要請した（朝）。10月15日 国連運営委員会はフランスの北アフリカ政策を議題とすることを決定した（朝）。国連総会はチュニジア問題、モロッコ問題、南アフリカ連邦の人種差別政策を議題とすることを可決した（朝・毎）。11月11日 解説「モロッコ、チュニジア、南ア連邦 もつれる植民地問題」（毎）。11月12日 国連政治委員会で南アフリカ問題が焦点となった（朝）。12月3日 国連政治委員会はチュニジア問題を討議した（毎）。12月4日 フランス政府はチュニジア問題の討議を拒否し国連政治委員会を欠席した（朝・毎）。12月5日 国連総会は「南ア問題検討」特別三国委員会の設置を可決した（朝・毎）。12月10日 国連政治委員会はチュニジア代表招請案を否決した（朝）。12月14日 解説「アフリカの資源と景気」（朝）。12月17日 国連政治委員会はモロッコ問題修正案を可決した（朝・毎）。12月18日 国連総会は「チュニジア自治」決議を可決した（朝）。12月19日 国連総会はモロッコ問題決議案を採択した（毎）。

北アフリカ

エジプト

1月1日 熊本特派員（カイロ）報告「エジプト 鉄条網の観光地」（朝）。1月3日 運河地帯で英エ衝突が勃発した（朝・毎）。英軍はスエズ市を封鎖した（朝）。1月7日 スエズ運河会社従業員のストが発生した（朝）。1月12日 スエズ地帯で交戦があった（朝・毎）。1月14日 カイロで反英デモが発生した（朝・毎）。1月18-19日 全土に非常事態が宣言された（毎）。1月19日 イスマイリアの英軍に掃討命令が下された（毎）。1月25日 イスマイリアの交戦で死者45名が出た（朝・毎）。1月26日 カイロに非常事

態が宣言され全土に戒厳令が布かれた（朝・毎）。1月27日 ナハス・パシヤ首相は解任され、後任のマヘル・パシヤが組閣を要請された（朝・毎）。1月29日 解説「エジプトの政変」（朝）。2月1日 ワフド党が新内閣に参加することになった（朝）。3月1日 マヘル・パシヤ首相は辞職した（朝・毎）。ヒラリ・パシヤは組閣に同意した（朝・毎）。3月2日 エジプト新内閣が成立した（朝・毎）。ヒラリ・パシヤ首相は会談再開を言明した（朝）。3月17日 英軍はイスマイリアから撤退すると発表した（毎）。3月23日 エジプト議会が解散された（朝・毎）。4月14日 渡辺善一郎（カイロ）報告「エジプト 予想外な国王への盲従」（毎）。4月18日 英国は駐エジプト大使を召還した（朝）。4月20日 英軍スエズ駐留司令官が更迭された（朝・毎）。5月5日 エジプト政府は英国の新提案を拒否した（朝）。6月29日 ヒラリ・パシヤ首相は更迭され、シリー・パシヤが新首相に就任した（朝・毎）。7月1日 内閣が成立した（朝・毎）。7月4日 カイロなどに非常事態が宣言された（朝・毎）。7月20日 内閣が総辞職した（朝・毎）。7月21日 ヒラリ・パシヤの内閣が成立した（朝・毎）。7月23日 ナギブ中將がクーデタを決行した（朝・毎）。ヒラリ・パシヤは辞任した。マヘル・パシヤ首相は臨時内閣を組織した（毎）。7月26日 ファルーク国王は退位・亡命した（朝・毎）。マヘル内閣は総辞職した（毎）。7月28日 解説「エジプト国王亡命の背景」（朝）。7月30日 マヘル・パシヤ首相はパシヤの称号を廃止すると発表した（朝・毎）。小島特派員（パリ）報告「エジプト国王退位の影響」（朝）。7月31日 最高裁判所は摂政会議の設置を承認した（朝・毎）。8月2日 臨時摂政会議員が任命された（朝・毎）。8月8日 ナギブ將軍は来年2月に総選挙を実施すると発表した（朝・毎）。8月13日 アレキサンドリアで暴動が発生した（朝・毎）。9月5日 マヘル首相は内閣を改造した（朝・毎）。9月7日 アレキサンドリアに非常事態が宣言された（朝・毎）。ヒラリ前首相が逮捕された（朝）。マヘル首相は辞職した（毎）。組閣を完了したナギブ將軍は首相となった（朝・毎）。9月8日 ナ

（龍法 '18）51-3, 26（1448）

ギブ首相は全政党の解散（再編）を命令した（朝・毎）。9月9日 社説「続く中東の不安と動揺」（朝）。解説「エジプトの政変」（朝）。9月16日 ワフド党は解散（再編）された（朝・毎）。9月26日 福湯特派員（カイロ）報告「エジプトの近情」（毎）。9月27日 カイロに非常警戒令が布かれた（朝）。9月29日 福湯特派員（カイロ）報告「ナギブ・エジプト首相と会見」（毎）。10月14日 ナギブ首相は摂政会議を廃止した（朝）。福湯特派員（カイロ）報告「カイロの旅」（毎）；続（10月18日）。11月11日 エジプト政府は新ワフド党と対立した（朝）。11月14日 ナギブ首相は全権を掌握した（毎）。11月20日 英エ交渉が再開された（朝）。12月9日 エジプト政府は1923年憲法を廃棄すると発表した（朝）。12月10日 エジプト政府は「五カ年改革計画」を発表した（朝）。12月20日 解説「焦点に立つエジプト」（朝）。

〔スーダン〕

1月29日 中立新党が結成された（朝）。4月2日 英国はスーダン議会に憲法草案を提示した（朝）。4月5日 エジプト政府は憲法草案の撤回を要求した（朝）。5月10日 英国・エジプト・スーダンの三者会談が開催された（毎）。5月31日 エジプト・スーダン会談が開始された（朝）。7月29日 エジプトのナギブ将軍はスーダンの自由選択を強調した（朝）。10月22日 英国のイーデン外相はスーダン自治政府を容認すると発言した（朝・毎）。10月23日 木村特派員（ニューヨーク）報告「スーダン問題の新展開」（朝）。10月28日 福湯特派員（カルツーム）報告「英・エ交渉の焦点スーダン」（毎）。10月29日 エジプト・スーダン協定が調印された（朝・毎）。11月3日 福湯特派員（カルツーム）報告「スーダンを訪ねて」（毎）；続（11月8日、11月11日）。

〔チュニジア〕

1月23日 チュニジア中部で暴動が発生した（朝・毎）。1月24日 フランス総督はチュニジア知事と会談した（毎）。1月25日 フランス増援軍が

上陸した（朝）。1月27日 小島特派員（パリ）報告「チュニジア騒乱と佛新内閣」（朝）。2月15日 チュニスでデモが発生した（朝）。3月25日 フランス官憲はチュニジア首相を逮捕した（朝・毎）。3月28日 サラ・エディン・バクーシャが首相に任命された（朝）。3月29日 フランス総督がチュニジア外相を兼任した（朝）。3月30日 小島特派員（パリ）報告「チュニジアの危機一應回避」（朝）。3月31日 フランス当局は民族主義者を逮捕した（毎）。4月5日 首相は組閣を完了した（朝）。4月19日 フランス外相はチュニジア総督と会談した（朝）。5月7日 小島特派員（パリ）報告「北アフリカとフランス」（朝）。8月6日 チュニジア総督は改革案を公表した（朝）。9月7日 フランスの改革案はチュニジア首長に拒否された（朝）。10月9日 小島特派員（パリ）報告「チュニジア問題 仏の態度硬化」（朝）。11月30日 フランス政府はチュニジア首長に協力を要請した（朝）。12月4日 チュニジアの労組幹部ファラー・アシェ（フェラト・ハCHED）が暗殺された（朝・毎）。12月7日 チュニスでデモ隊と警察が衝突した（毎）。12月17日 チュニジア首長はフランス総督の要求を拒否した（朝）。12月20日 チュニジア首長は都市行政改革法令に調印した（朝・毎）。12月21日 解説「チュニジア問題一まず落着」（朝）。

[モロッコ]

3月30日 タンジールで反仏暴動が発生した（朝・毎）。4月4日 フランスとスペインの軍隊はタンジールに進入した（朝）。12月8日 カサブランカで暴動が発生した（朝・毎）。12月11日 イスティクラル党と共産党が非合法化された（毎）。12月14日 小島特派員（パリ）報告「冷戦の新戦場＝モロッコ」（朝）。12月22日 フランス総督はモロッコ自治改革を強行した（毎）。

東アフリカ

エチオピア

10月17日 福湯特派員（アディス・アベバ）報告「皇帝の国、エチオピ

アを訪う」（毎）。

〔エリトリア〕

9月11日 エリトリアがエチオピアとの合邦国家として誕生した（毎）。

〔ケニア〕

10月20日 英国植民地省はケニアに非常事態を宣言し軍隊を急派した（朝・毎）。10月21日 解説「ケニアの秘密結社」（朝）。福湯特派員（アデイス・アベバ）報告「暴れ回るモウモウ団」（毎）。10月22日 ウンデリ首長が刺殺された（朝）。10月30日 原住民三千人が逮捕された（毎）。10月31日 モウモウ団容疑者227名が逮捕された（朝）。11月6日 英国のリトルトン植民地相はモウモウ団を鎮圧しなければならないと発言した（朝）。

南部アフリカ

南アフリカ連邦

7月11日 ワシントン銀行はウラニウム増産のため南アフリカ連邦に借款を供与すると発表した（朝）。10月19日 ポート・エリザベスで暴動が発生した（朝）。11月10日 イースト・ロンドンで暴動が発生した（毎）。

1-2 報道と解説

1952年4月28日、対日平和条約が発効した。対日平和条約を批准したアフリカ諸国（エチオピア帝国、エジプト王国、リベリア、南アフリカ連邦）と日本の外交関係が動き始めた。日本政府は南アフリカ連邦に総領事館を開設することを決定した。「南アに総領事館開設 政府は南アフリカ連邦の首府プレトリアに総領事館を開設することを決め、14日の閣議で正式決定する」（朝、10月14日）。日本とエジプトの外交関係が再開された。「エジプトと外交関係再開 外務省は5日エジプトとの外交関係が3日から再開されたと発表した。これにより相互に公使を交換するが駐エジプト公使には与謝野秀氏（駐ベルギー大使館参事官）が内定している」（毎、11月6日）。

エジプト問題（英国・エジプト関係）について大量の記事が掲載された。

朝日新聞は元旦号に「世界の危機線 現地をさぐる」を特集し、熊本特派員の報告を掲載した。「エジプト 鉄条網の観光地 [カイロ＝熊本特派員発] (スエズ運河は) 飛行場や兵営や弾薬貯蔵倉などをもった事実上の一大基地なのである。記者はわき返るエジプト国民の非難の声を満身にあびながらも、どんなことがあってもそれを手離したくない大英帝国の苦悩の姿を思いやらざるをえないのであった」(朝、1月1日)。毎日新聞の福湯特派員は日本人記者としてナギブ首相と初会見をした。「ナギブ・エジプト首相と会見 [カイロ28日福湯本社特派員発] ワフド党もついにナギブ首相に屈服、27日夜解党を発表した。彼の正面の敵は自ら姿を消した。彼は文字通りエジプトの独裁者となった。28日朝記者はナイル河に近い首相官邸に彼を訪れ会見した」(毎、9月29日)。

エジプト問題の展開はエジプト・スーダン関係を進展させた。10月29日、エジプト政府とスーダン独立支持派代表は協定に調印した。協定は次の三点を確認した。「一、民族自決権を行使することを認める。一、スーダンに完全な自治政府を設立する。一、一定期間のうちにスーダンから英軍が引揚げよう要求する」(朝、10月31日)。

フランス領北アフリカ諸国(チュニジア、モロッコ、アルジェリア)において、アラブ民族主義が台頭し、フランスの「力の統治」が窮地に立たされた。それでもフランス植民地統治の業績が評価され、植民地支配が正当化された。朝日新聞では、小島特派員がパリから報告した。「チュニジア騒乱と佛新内閣 [パリ＝小島特派員26日発] 暴動の中心をなしているのはネオ・デツール党という独立派で、その首領ブルギバは最近フランス官憲の手で逮捕されたが、それがさらに独立派の反抗運動に油を注いだ」(朝、1月27日)。

東アフリカではエリトリアの誕生とケニアのマウマウ運動があった。元イタリア領植民地エリトリアはエチオピアとの合邦のもとで新国家として誕生した。「新国家エリトリヤ誕生 [アスマラ(エリトリヤ)11日発＝ロ(龍法'18)51-3, 30(1452)

イター特約] 東アフリカのエリトリヤは従来イタリア領であったが11日新国家として独立した。これは1950年の国連総会でエリトリヤをエチオピアの主権の下に合邦することが決定されたため」(毎、9月12日)であった。ケニアでは民族運動マウマウ(モウモウ)の活動が活発となり、英国は10月20日に非常事態を宣言した。「ケニアに非常事態宣言 [ロンドン20日発=AFP] 英植民地省は20日、東アフリカのケニアに非常事態が宣言されたと次の通り発表した。ケニアの警察当局は「マウマウ」テロ運動の加担者130名を直ちに逮捕するものとみられる」(朝、10月21日)。毎日新聞の福湯特派員はマウマウをテロ団体、共産党の活動と断定した。「暴れ回るモウモウ団 アフリカ全土に民族主義の火の手 [アディス・アベバ19日福湯特派員発] 既に東アフリカの英国植民地ケニアでは土着民のテロ団“モウモウ”が跳梁を極め、嚴重な夜間通行禁止がしかれている有様である。…ただ見逃せないことは各地とも共産党が民族主義者と一体になって活動している」(毎、10月21日)。朝日新聞も同様の記事を掲載した。マウマウは秘密結社、テロ団体と糾弾された。それはイギリス政府筋の情報(虚偽報道)の受け売りであった。

日本人記者の先駆的報道として福湯特派員(毎日新聞)の報告は評価できる。名文記者と評されたが、しかし彼の視点には問題があった。アフリカ人は未開というネガティブな固定概念に取り憑かれていた。エジプト人は「インテリ以外はズルくて不潔」(毎、10月14日)、スーダンには「アフリカで最も未開な人種がいて」(毎、10月28日)、「原始アラビア人は土着民の中では最も進んでいるのだがそれでも知能程度は極めて低い」(毎、11月3日)。小島特派員(朝日新聞)は「土人」を多用した。「アフリカ=未開」という先入見である。それでも「土人」の「未開」はヨーロッパの「白人優越」植民地主義の結果であることを認める記事が出てきた。「英仏植民地の多くでは今なお「白人優越」制の下に、土民はほとんど政治的無権利の状態におかれている」(朝、12月14日)。

映画が注目された。林壽郎による映画「アフリカ野獣狩」は1952年2月に上映された。広告は次のとおりである。「西部劇を壓倒する快適なスリル！日本人が始めて挑む百獣の群れ！ケニア大草原 アフリカ野獣狩 撮影・林壽郎 構成・石山稔 解説・徳川夢聲」（朝、2月9日）。また1952年8月には「アフリカの女王」（ハンフリ・ボガードとキャサリーン・ヘプバーン主演）が上映された。その他、「モロッコ城塞」「腰抜けモロッコ騒動」が公開された。（なお映画の紹介は新聞に掲載された広告による）。

2-1 論文と著書

論文

「アフリカの野獣狩り——上野動物園林壽郎氏の第一報——」『アサヒグラフ』新年号、1952年1月、27-31頁。織田武雄「フェニキア人のアフリカ大陸周航」人文地理学会編『歴史地理学の諸問題』柳原書店、1952年1月、152-162頁。「北アフリカのレジスタンス」アンリ・ミシェル（淡徳三郎譯）『レジスタンスの歴史』白水社、1952年1月、60-69頁。「衝突事件あとを絶たず = 英・エ紛争 =」『世界資料』6巻1号、1952年1月、47-50頁。ピーター・スコット（中村健訳）「南アフリカにおける沿岸沖合漁業」（其の一、其の二、其の三）『国際漁業資料』6号、1952年1月、65-74頁；7号、1952年3月、36-45頁；8号、1952年5月、46-55頁。と・く・ざ・わ（徳沢竜潭）「現代エジプトの覚醒」『讀書春秋』3巻1号、1952年1月、30-31頁。原祐次郎「中近東の民族解放闘争をめぐって～エジプト問題を中心に～」『唯物論者』2巻1号、1952年1月、8-12頁。「ベルギー領コンゴの貿易状況——ブラッセル在外事務所報告——」『經濟と外交』47号、1952年1月、33-34頁。本會調査部「アフリカ（2）——エジプト——」『ジェトロ』2巻1号、1952年1月、10-19頁。安田「エジプト首相の解任」『時事通信 時事解説版』1868号、1952年1月、1頁。横山正幸「砂漠の國エジプトと自動車の話」；「アフリカの自動車市場短描」『自動車海外情報』3号、1952年1月、34-39、（龍法 '18）51-3、32（1454）

54-55頁。大和田健一「中東のリビア独立とその影響」『實業展望』24巻2号、1952年2月、38-39頁。「古代埃及 アブ・シムベルの驚異」「岐路に立つエジプト」『国際文化画報』4巻2号、1952年2月、21-22、33-34頁。「在プレトリア総領事館」外務省『職員録 昭和二十七年二月一日現在』外務省大臣官房人事課、1952年2月、61頁。「新局面に入つたエジプト問題」『経済と外交』49号、1952年2月、44-45頁。ジョセフ・デ・ハビブ「埃及市場の近況」『海外貿易情報』26号、1952年2月、7-9頁。平澤和重「エジプト政變の描く渦紋 紛争は慢性化の徴候」『ダイヤモンド』40巻5号、1952年2月、28-29頁。「ベルギー領コンゴの繊維市場——ブラッセル在外事務所報告——」『経済と外交』51号、1952年2月、19-35頁。安田志郎「エジプト紛争は片づくか」『時事通信 時事解説版』1871号、1952年2月、2-4頁。天野蛇太郎「アフリカ西海岸北上記」『海運』294号、1952年3月、79-84頁。調査部「アフリカ市場（3） ポルトガル領アフリカ——アンゴラ・モザンビーク——」『ジェットロ』2巻3号、1952年3月、4-13頁。古川桂一「日本商人アフリカをゆく」『経済批判』2巻3号、1952年3月、44-48頁。「ベルギー領コンゴ輸入手続變更——ブラッセル在外事務所報告——」『海外貿易情報』27号、1952年3月、15頁。北原秀雄「コンゴとはどんな國か」『實業之日本』55巻8号、1952年4月、42-43頁。北原秀夫（雄）「最近のアフリカ事情」『海外貿易情報』28号、1952年4月、1-5頁。「黒い太陽と黒人の話 アフリカ・バンギにて」『アサヒグラフ』1952年4月23日号、16-17頁。「チュニジア紛争問題」『経済と外交』58号、1952年4月、32-36頁。「轉換期に立つエジプト民族運動」『世界』76号、1952年4月、13-16頁。樋口清（紹介）「モロッコの都市計画」『国際建築』19巻4号、1952年4月、9-15頁。「アルジェリアの経済発展」『海外経済事情』99号、1952年5月、14頁。須藤次郎「エジプト國籍法」『法學研究』25巻5号、1952年5月、26-31頁。南条「重視されだしたアフリカ」『エコノミスト』30巻14号、1952年5月、33頁。「人間の作つた山（エジプト）」～「虹のはて（南アフリカ）」V.M.ヒルヤー（光

吉夏彌譯)『世界をまわろう——子どものための世界地理——』岩波書店、1952年5月、203-242頁。ジョセフ・デー・ハビブ「英埃紛争と其影響」；山邊義昭「東阿に於ける日本商品情況」『海外貿易情報』29号、1952年5月、12-13, 17頁。「ベルギー領コンゴの麦酒産業概況——ブラッセル在外事務所報告——」『経済と外交』62号、1952年5月、28-33頁。「アフリカの貿易事情」『大阪貿易館報』1952年6月号、6-7頁。内山敏「カイロの「暗い土曜日」 エジプトの民族闘争」『改造』33巻8号、1952年6月、143-147頁。「白領コンゴ市場におけるベルギーの地位——在ベルギー日本大使館——」『経済と外交』68号、1952年6月、26-36頁。「モロッコ」「サハラ前哨地帯」きだ・みのる『パリ・東京・モロッコ』要書房、1952年6月、169-190, 190-199頁。「アフリカ」玉川大学編『玉川児童百科大辞典 20 社会科(六) 世界の地理』玉川大学、1952年7月、249-266頁。伊藤昇「モロッコの都市計畫」『新都市』6巻7号、1952年7月、7-14頁。柿本典昭(紹介) B. トーマス「近代サハラ横断路」『人文地理』4巻3号、1952年7月、79-81頁。「ナイルの星シリウス」野尻抱影『星と傳説』創元社、1952年7月、48-55頁。ジョセフ・デー・ハビブ「埃及經濟産業の見透し」「エジプトに於けるゴム・タイヤ市況」『海外貿易情報』31号、1952年7月、7-8, 14-15頁。樋口節夫(紹介) R. スモールウッド「ケニア草原の農業」『人文地理』4巻3号、1952年7月、81-82頁。丸屋至「綿糸布市場としての白領コンゴの概況」(一・二・三)『輸出綿糸布月報』2巻7号、1952年7月、33-42頁；2巻8号、1952年8月、33-42頁；2巻9号、1952年9月、29-37頁。A「エジプト政界の大掃除 G・M・ナギブ中將」『世界週報』33巻24号、1952年8月、23頁。佐藤義平「世界各国の知識(アフリカ4カ国)」『社会人』40号、1952年8月、35-43頁。「チュニジアの民族独立運動」『社會運動通信』334号、1952年8月、3頁。「白領コンゴ市場に対する1951年度主要輸出国商品別輸出統計——在ベルギー日本大使館——」『経済と外交』78号、1952年8月、15-19頁。原子林二郎「國王退位後の政局はどこへ? エジプト・クーデ」(龍法 '18) 51-3, 34 (1456)

ターの背景」『時事通信 時事解説版』2021号、1952年8月、2-5頁。「佛領ソマリの経済事情」『海外経済事情』105号、1952年8月、13-14頁。「“腐敗”という名の国王 ■■■ファルークI世始末記■■■」『世界週報』33巻24号、1952年8月、36-37頁。山邊義昭「東阿弗利加に於ける綿布、陶磁器、硝子品、自轉車、ミシン等の市況」『海外貿易情報』32号、1952年8月、17-18頁。アンドリュウ・ロス「フランス領植民地の動き——チュニジアと佛印——」『世界』80号、1952年8月、107-116頁。伊藤昇「モロッコの工業と都市計画」『建築雑誌』67巻790号、1952年9月、20-25頁。小河隆二「エジプト国王の追放」『官公労働』6巻9号、1952年9月、46-47頁。「1951年度白領コンゴ—財政経済概観——在ベルギー日本大使館——」『経済と外交』81号、1952年9月、11-16頁。サル・タス「モロッコは西歐の敵か——カサブランカからの手紙——」『自由の旗のもとに』1巻1号、1952年9月、43-46頁。武者小路公共「南船北馬」『心』5巻9号、1952年9月、48-56頁。「愛と憎しみの南阿政治」『リーダーズ・ダイジェスト』7巻11号、1952年10月、106-113頁。「エジプトの反亂」『世界』82号、1952年10月、244-248頁。岡倉古志郎「ピラミッドのかげで——中東植民地体制の危機——」『経済評論』1巻10号、1952年10月、56-63頁。ジョセフ・デー・ハビブ「埃及に於ける陶磁器情況」『海外貿易情報』34号、1952年10月、13-16頁。林壽郎「アフリカの猛獣狩り」『中学時代』4巻7号、1952年10月、64-69頁。藤井義三郎（紹介）R.マーフィ「北阿の没落——人間か気候か」『人文地理』4巻4号、1952年10月、77-79頁。「アルジェリアの外國貿易」『海外経済事情』111号、1952年11月、13-14頁。佐藤義平「世界各国の知識（アフリカ10カ国）」『社会人』43号、1952年11月、62-71頁。清水英夫「民主國は獨裁者がお好き——エジプトの英雄ナギブの場合——」『東洋經濟新報』（別冊）11号、1952年11月、137-143頁。田辺宗夫「エジプト」；西野照太郎「アフリカ概説」世界現勢事典編集委員会編『世界現勢事典』東京堂、1952年11月、420-428、428-438頁。林三郎「國連總會の二つの問題——もめる南北アフリ

カの民族運動——』『政治経済』5巻11号、1952年11月、22-23頁。林壽郎「草原に獣を追つて 林壽郎氏のアフリカ土産話」『婦人之友』46巻11号、1952年11月、62-65頁。林壽郎「猛獣の生態——アフリカ紀行——」(①②③④⑤⑥⑦)『科学朝日』12巻11号、1952年11月、75-81頁；12巻12号、1952年12月、36-40頁；13巻1号、1953年1月、39-45頁；13巻2号、1953年2月、40-46頁；13巻3号、1953年3月、37-44頁；13巻4号、1953年4月、34-40頁；13巻6号、1953年6月、35-43頁。山邊義昭「東阿原住民の生活向上と各國雜貨の競争状況」『海外貿易情報』35号、1952年11月、11-12頁。アンドリュー・ロス「出漁るエジプトの「馬上の人」」『世界』83号、1952年11月、21-24頁。入江啓四郎「紛争解決の目算はあるのか チュニア問題」『時事通信 時事解説版』2135号、1952年12月、2-4頁。甲斐静馬「中東民族主義運動の経済的基礎」『世界経済』7巻12号、1952年12月、19-25頁。「激化する植民地の解放闘争——インドシナ・マライ・イラン・エジプト・アフリカ——」『産業労働月報』6巻12号、1952年12月、22-25頁。藤岡謙二郎(紹介)R.G.グッドチャイルド「ローマン・リビア」『人文地理』4巻5号、1952年12月、52-55頁。松岡聖「英国の暗雲 マウ・マウ」『話の手帖』1巻6号、1952年12月、78-79頁。「南ローデシアの経済概観」『海外経済事情』113号、1952年12月、13-14頁。

著書

石田龍次郎・渡邊光編『南アジア・アフリカ』(世界地理大系 V)河出書房、1952年2月。小山莊一郎『猛獣境冒険記』妙義出版社、1952年5月。別技篤彦『未開拓の国』(世界の国16)国民図書刊行会、1952年5月。『エジプト国の出入国管理法』法務省入国管理局、1952年9月。リッチ・コールダー(甲斐静馬譯)『沙漠と闘う人々』岩波書店、1952年9月。外務省経済局第六課『1951年度エジプトの経済貿易事情と最近に於ける土地改革の問題』外務省経済局、1952年10月。寒川光太郎『スエズ運河の父 レセップス』偕成社、1952年10月。百々巳之助『アフリカ統治制度論』(博士論文、(龍法 '18) 51-3, 36 (1458))

日本大学）1952年10月。外務省経済局第六課『エジプト外国貿易（1951年度）』外務省経済局、1952年12月。林壽郎『アフリカの猛獣狩』朝日新聞社、1952年12月。

2-2 文献と概説

戦後、アフリカ現地を視察した最初の日本政府官僚は北原秀雄（通商産業省市場第一課長）であった。1951年12月から1952年1月まで、英領西アフリカ（ナイゼリア、黄金海岸）、白領コンゴ、英領東アフリカ（ウガンダ、タンガニカ、ケニア）を訪問した。「戦後初めての日本人」（「コンゴとはどんな国か」42頁）と本人が記述している。外交公館の設置について「今後は西アフリカ方面にも設ける必要がある」（「最近のアフリカ事情」5頁）と提案した。『日本貿易の現状』（通商白書、1952年7月）はアフリカでは南アフリカ連邦だけをとりあげ、日本の出超で英連邦諸国の輸入制限措置の影響を受けている（110頁）と分析した。

日本人商人の報告として興味津津なのは古川桂一「日本商人アフリカをゆく」である。古川（グリーンヒル加藤商会輸入課長）は1951年7月に日本を出発し、アフリカに四カ月半、印パに一カ月半滞在した。アフリカではカイロ、南アフリカのジョハネスバーグ、ポートエリザベス、ケープタウン、南ローデシアのソールスベリー、ブラワヨ、ボ領（モザンビーク）のロレンソマックス、東アフリカのナイロビ、モンバサを訪問したという。出張の主目的は南アフリカにおける石綿の購入、従目的は輸出市場の調査であった。現地市場調査の報告内容は秀逸である。大阪の商社はアフリカで活動していた。1952年5月、大阪府立貿易館において開催された情報交換会「アフリカの貿易事情」の出席者は森島（日綿実業）、八木（八木通商）、由比（日商）、小原（伊藤忠）、清水（又一）であった。

1952年、アフリカ関連の出来事として日本人から多大の関心を集めたのは林壽郎の「アフリカ猛獣狩」であった。林は1951年10月12日にナイロビ

に到着し、1952年6月7日にモンバサを出港し、48の鳥獣を連れて神戸に入港し、横浜に戻った。東京大学理学部動物学科卒業後、上野動物園に企画課長として勤務していた林は動物購入を目的としてケニアに出張した。著書『アフリカの猛獣狩』は正直な記録である。目的として「私はカバを買いにアフリカへ行かなければならない」(3頁)と記述した。林が見聞したアフリカは未開ではなく、暗黒でもなかった。「私の見たアフリカはいわゆる、日本の冒険談にあるような、暗黒の大陸でヤバンな未開の土地ではありませんでした」(201-202頁)。一躍、有名人になった林は動物だけでなく、「アフリカを知る人」として各方面から引っ張りだこになった。アフリカ問題に日本人の関心を惹起させた人物として評価される。

エジプトで爆発した民族主義は他の植民地に波及した。1月26日のカイロの民衆蜂起は「その他の植民地半植民地」(内山敏「カイロの「暗い土曜日」」147頁)の至る所で起こっていた。エジプトの民族解放運動の炎は「全中東、北アフリカの植民地体制」(岡倉古志郎「ピラミッドのかげで」62頁)を危機に陥れた。「こうして各国人民の生活は、ますます破壊され、かれらは否応なしに反帝、反戦、民族解放運動へと立上ることを余儀なくされている」(甲斐静馬「中東民族主義運動の経済的基礎」25頁)。中東の民族解放闘争は世界平和に貢献した(原祐次郎「中近東の民族解放闘争をめぐって」12頁)。アフリカの民族解放運動についての言及が現れた。「植民地解放運動に一番たちおくらせていたアフリカも、昨年からついに鳴動しはじめた。…今後の激化を豫想されるアフリカの植民地解放運動は、地球の全植民地を解放にわきたたせる最後の発火点となつている」(「激化する植民地の解放闘争」25頁)。マウマウ事件が表面化して僅か1カ月の間に書き上げられた松岡聖「英国の暗雲 マウ・マウ」は絶品である。論文は当時ほとんど知られていなかったケニア民族主義組織(キクユ中央協会やケニア・アフリカ人同盟)に言及し、マウマウを危険なテロ団体と喧伝した英国の虚偽報道を批判したケニア・アフリカ人同盟幹部の発言を引用した。

実に精確である。なお松岡聖の誰何は不明だが、同時期に確実な論文「英領ケニアのマウマウ團」(『世界週報』1953年1月)を執筆した井上勇(ジャーナリスト、時事通信社)の筆名であろうか。

概説書において、アフリカ問題が記述されるようになった。『世界現勢事典』では田辺宗夫(外務省)がエジプトを、西野照太郎(国立国会図書館)がアフリカ全般を担当した。これが西野照太郎のアフリカ論の出発点であった。その後、西野はアフリカ専門家として大活躍することになった。戦後最初の体系的地理書と謳われた「世界地理大系」の『南アジア・アフリカ』における「アフリカ」の執筆者は石田龍次郎、竹内常行、浅香幸雄、矢澤大二であった。アメリカの進歩派ジャーナリスト、アンドリュー・ロスは『世界』誌上でアフリカ報告を開始した。研究者の論文では、須藤次郎(慶応義塾大学法学部助教授)「エジプト國籍法」がある。天野蛇太郎「アフリカ西海岸北上記」は第二次世界大戦前の西アフリカ航海の記録(1936年、國際汽船興福丸船長相良昂の報告)を紹介した。貴重な史料である。

アフリカ＝「未開」論は継続された。「アジアもヨーロッパも共に古い文化の歴史をもっていますが、アフリカには、そのような文化は生まれませんでした」(『玉川兒童百科大辞典』265頁)。白人と黒人の違いについては非科学的な俗説が繰り返された。「子どものころ、わたしたちは、よく、神さまが、ひるま、白人をおつくりになり、夜、黒人をおつくりになったといったものです」(『世界をまわろう』218頁)。